

<共同研究報告>琉球文化圏の墓制と祖霊祭

著者	下野 敏見
雑誌名	日本研究：国際日本文化研究センター紀要
巻	12
ページ	101-119
発行年	1995-06-30
その他の言語のタイトル	Grave of the Ryukyus and Worship at Ancestors
URL	http://doi.org/10.15055/00000822

〈共同研究報告〉

琉球文化圏の墓制と祖霊祭

下野 敏 見

一、はじめに

琉球文化圏とは、トカラ列島から与那国島までと考えています。トカラ列島は、琉球とヤマトの中間で、どちらにも属すると考えられますが、歴史的に見ますと古代末ごろから中世の頃は琉球に属していたと考えるのがいいと思います。それは、文化のみでなく政治的にも属した時期があると考えられます。直接には奄美に属していたのですが、奄美は琉球に属していたので、結局、トカラ列島は琉球の勢力圏の中にあつたわけです。といいますのは、トカラ列島には、奄美・沖縄と共通する民俗事象が

多く、しかも村の組織の関係にも沖縄式のものが多いことも認められるからです。

しかし、ここではそれらのことは省略して、琉球文化圏の墓制と祖霊祭に焦点をあてて述べようと思います。トカラ列島から与那国島までの墓というのは、いろいろなタイプがありますし、又、墓についての論争も沖縄の方でもかつて行われましたが、ヤマトの側でもいろんな方がいろんな機会に書いています。しかも現地に足を運ぶと、さまざまな墓制が見られてとまどうわけがあります。そこで、これを少しでもすっきりと理解しようというのが今回のねらいであります。

墓制と、墓制に伴う祖霊祭は、さまざまな形態をとり、地域ごとにも違う、またある意味では、時代ごとにも違うと思います。が、それをどう理解するかということが肝要であります。

二、いろいろな墓制

墓制はいろいろありますが、徳之島とか沖永良部島の墓地に行きますと、ヤマト型の三段積みみの角柱石塔を建ててあります。そして石塔の後に半胴甕状の骨壺をおき、半分埋めてあり、上には蓋をしてあります。壺の中には、人骨がはいっていて、雑骨を下に頭骨を上にし、頭骨の上には髪の毛を

のせてあったりします。そして人は、石塔の前にかがんで石塔の方に向かって拝んでいます。骨壺に入っているのは、これは洗骨改葬したものですから、第二次葬であります。

ところで、沖永良部島では伸展葬が多く、土葬して数年後に洗骨改葬したのを骨壺に入れてあるわけで、石塔の下には人骨はないのであります。こうした墓制は、角柱石塔はヤマト式であり、洗骨した骨を納めた骨壺は琉球式であるので、ヤマト・琉球折衷タイプだといえます。人骨がその下に埋まつていない石塔を拝み、人骨のある骨壺はその後にあるというのは両墓制ではないかという疑問も起りますが、しかしこれは、両墓制ではないようです。両墓制は同じ時間帯に、離れた所に埋め墓と参り墓の両方がなければなりません。沖永良部島の場合は、第一次葬（埋葬）と第二次葬（洗骨改葬）というぐあいに時間が違っています。しかも石塔と骨壺は別々であるとはいえないがら、五〇センチメートルも離れていない

というほとんど同じ所にありますから、両墓制とはいえない。この墓制は近代沖永良部島が生んだ面白い墓制だといえましょう。

このようなヤマト型の墓石塔自体は、奄美には江戸時代から入ってきていて、薩摩山川産の山川石というのがよく使われています。山川石は黄色く美しい石ですが、トカラ列島から奄美諸島まではいり、沖繩にも若干はいつています。鹿児島旅行をした先祖達が、風待ちし、日和見をした山川港で、値段の高かったはずの山川石を買って帰ったということは、大へん感心させられますが、そのように江戸時代からヤマトの墓石がはいっているわけです。それが奄美諸島の場合、その傾向が著しく、そこが沖繩と違っている点です。

ところが、最近はこの石塔に代って、ヤマト型の納骨堂がはやって、奄美の墓地はほとんどこれになりつつあります。この中に火葬骨を納めるのですが、火葬の徹底と共に納骨堂化が進んできています。奄美諸島では、このように墓制の変化が急速であ

りますが、沖繩諸島では亀の甲墓は依然として各地に造られています。先日、斎場御嶽のすぐ下の村落で、壮大な新しい亀の甲墓を見て、おやおや、中国の福建省で見た林家のものと、よく似ているなあと感心したのでした。

亀の甲墓の場合、入口からはいって中に木棺をおき、数年後に洗骨して壺に入れると先の一段高い所におきます。そして次々に死者が増えていくと、もう一段高い所におき、三十三年忌を過ぎると段の奥のチブという穴に落としてしまいます。木棺の段階では風葬であり、第一次葬であります。洗骨改葬すなわち第二次葬をして、そして三十三年忌まで拝むとそれでおしまになる、亀の甲墓はそういう第一次葬、第二次葬が同じ墓の中で営まれるという大へん便利な墓制であります。

この亀の甲墓は、中国にもあって、特に福建省あたりに今もたくさん事例がありますので、中国から伝播した墓制習俗であることは明らかです。⁽²⁾ところで亀の甲墓が、

沖繩本島の葬・墓制変遷推定表

延宝八年頃 (一六八〇頃)	伊江家亀の甲墓 築造	門中、亀の甲墓、清 明祭(貴人・士族↓ 明治以後一般へ)
慶長十四年 (一六〇九)	島津氏琉球侵寇	洗骨改葬
応永十一年 (一四〇四)	冊封使渡来	ムヤ(風葬喪屋。洗 骨あり) (婦化人・貴人↓ 士族)
明德三年 (一三九二)	明へ留学生派遣 閩人三六姓帰化	ムヤ(風葬喪屋。洗 骨なし) (貴人↓一般へ)
文応元年 (一二六〇)	英祖王即位	遺棄葬の風葬 (全琉)

いつ頃沖繩に伝来したかということについては、「沖繩本島の葬・墓制変遷推定表」にまとめてみました。これは私が推定したのですけれども、右側の下の方に洗骨改葬、それから門中、亀の甲墓、清明祭、こういうふう書いてあります。亀の甲墓というのは、その上に記してある伊江家の亀の甲墓が、いちばん古い年代のものであるとい

う事ですので、これが延宝八年頃(一六八〇頃)だとしますと、比較的に新しいわけです。

その亀の甲墓は、奄美には全くはいっていません。奄美諸島の南部の与論島から北にはありません。ということは、島津氏が沖繩を攻めた慶長十四年(一六〇九)以後に、沖繩にはいつてきたわけでありま

す。もしも奄美が沖繩から分離される以前に沖繩にはいつておれば、奄美にもそれが見られてよいのですが、事実はそうではありません。したがって亀の甲墓の沖繩への伝播は、やっぱり延宝八年頃だろうと考えられます。ま、早くても一番下に点線であってあるように、慶長十四年以後、つまり十七世紀初頭から以後になる、というわけです。ただ、沖繩では与那国島まで、これがずっと分布していることはよくご承知の通りであります。

さて、亀の甲墓に対し、破風墓もあちこちで見られますが、これは琉球の玉陵がもつとも古いのではなからうかという説があります。それは、『球陽』によると一五〇一年ということですから、亀の甲墓よりもやや早いということになります。またこれと似た家型の墓と、さらにそれが機能化した箱型の墓があります。そして、最近の家型、箱型の小形のものが、しかも非常にきれいなものがどんどん造られています。今でははじめから火葬骨を納めるのですから、小形でいいわけです。以前はそ

の中で第一次葬として風葬をしたので大きくなくてはなりません。こういうふう

に沖繩の墓制がいま目の前でどんどん変わっていくわけ

です。

次に、積石墓について述べますと、それは木棺のまわりや上にサンゴ礁の小石をたくさん積んだ墓です。土のやわらかい地域では、埋めたりもしますが、サンゴ礁質の土壌の所はほとんど木棺の積石墓です。これはもう風葬といつてよいのですが、この

積石墓は木棺を造れる地域もしくはそういう段階の所でないといえられせん。トカ列島の小宝島などが積石墓の多い島であるということになります。

喜界島と沖永良部島で非常に顕著なのが崖を掘りあけて、中に四角い部屋を設けたトゥール墓です。部屋の中には骨壺をいくつかおいてあります。またそばにヤマト式の石塔があつたりします。石塔に刻まれた年号を見ますと、江戸時代のもが多く、江戸中期がいちばん古いようです。喜界島には世の主の墓があつて、大体一四四九年頃のものとしてあります。それで、トゥール墓のはじまりは十五世紀中頃にも遡りますが、でもそれが民間に普及していくのは年号のない古いものを含めて考えますと、江戸時代の初期から中期頃以降ということです。

トゥール墓の前の外庭には近年はそこにヤマト式の角柱石塔が建つようになりました。それは前庭でいったん土葬し、のち洗骨改葬して骨壺に入れて、トゥール墓の中

に納めるようになったのです。そして次に土葬ののち洗骨改葬して、ヤマト式角柱石塔墓の後に骨壺を埋めて拝むという先ほど述べたような形式になったのです。このように、奄美諸島の墓制はいくつかの変遷をへてきているのであります。

崖下葬でもう一つ注目しなければならぬのは、これも喜界島と沖永良部島に圧倒的に多く、かつ琉球文化圏全域に見られるのですけれども、村落はずれの崖下の少しくぼんだところの、その前の方に少し石を積んで囲いをし、その中に人骨をおいてある墓です。これもさまざまな形態があつて骨壺があるのもあれば、またそれがなくて人骨がむき出しのものもあるというぐあいです。人骨がそのまま見えるということは、それが風葬であることはまちがいない。その辺に住んでいる方に、これは先祖ですかと聞いてみますと、ほとんどがそれは違う、先祖ではない、といいます。それは明らかにその集団の先祖であるはずです。ということは、もう忘れられてしまっているわけ

ですが、私共も四、五代前の先祖の名前をいえといわれてもなかなかいえません。そんなわけで、人間みんな忘れっぽいのですが、墓制におけるこの風葬こそ、その単純さにおいて琉球のもつとも古い墓制であろうと考えられます。

三、墓制の二つの流れと祖霊祭

その風葬墓に関連して述べますと、沖永良部島に行くと、ウジチャマという森があります。ウジチャマはフジチともいいます。これはコシキの訛りでレプラのことです。レプラ患者をここに捨てて、あとに木が生えて森になったところだといっています。でもそれは、レプラに象徴するようないろいろな伝染病患者の死体をおいた、あるいはそれを隔離した場所ということが考えられます。

平坦な沖永良部島では崖のない村落も多い。そんなところでは風葬地も平地に求めたに違いありません。又、古く遡るほど、崖に横穴を掘ってトゥール墓を造るよりも、

平地に葬ったほうが簡単であり、やりやすいはず。ですから、ウジチャマには非常死人のみでなく、正常な死者も葬つてあるということが容易に考えられます。

ところでウジチャマは非常に烈しく祟るのです。ほら、あそこにウジチャマがと指さしただけでも祟るのです。沖永良部島では今もウジチャマは何カ所もあつて生きています。島民の方々は非常に恐れてその森には絶対に入らない。そしてだいに森を立ててあります。なぜ祟るかということがまた問題ですけれども、これは結論からいいますと、その森の非常死人の霊は特にまつられざる霊ですから、それが浮遊霊になつて祟っているということになります。それと樹木がいつばい生えていて、アニミズム的なその樹霊の祟りということもあらうと思います。その祟りを判定するのはユタであり、癒すのもユタであり、シャーマンとの関係が密接なことを指摘できます。

このように見えますと、琉球文化圏において墓制のいちばん古い形は、やはりそ

の崖下葬的なあるいは平地のウジチャマ的な墓地であるようです。これらは遺棄葬的な墓地です。そして風葬地であり、葬つたきり二度と行かず、又そこでは拝みもしないという葬・墓制です。遺棄葬の風葬、これは非常に古いものだとすることを強調したいと思います。

そんな風葬墓地は与那国島にもあります。飛行場から数百メートル行ったところの山の中の、少し崖になった場所の下に人骨が散乱している所があります。草がかぶつていて少し掘らないと出て来ないような状況ですが、崖下に沿つてずつとあります。与論島でも以前はこのような場所が見られました。

トカラ列島の小宝島では、昭和三十年代までは、こういう葬法でした。村落東南にテラヤマといつてビローの樹が何百本も茂っている森があります。それは風葬の山であつて、死者をそこに葬つたきり、二度と行きません。その森の中の風葬跡は数えてみたら五十基までは数えられましたが、先

の方は草が茂っていて、ハブがこわくて数えることはできませんでした。その後、小宝島ではテラヤマの前の方に、ヤマト式の角柱石塔を建てて、洗骨改葬した骨壺をその下に納めるという方式に変わり、奄美・ヤマト折衷型の葬・墓制になっています。

このように、琉球文化圏の北端のトカラ列島も南端の与那国島も遺棄葬地域であるということは、琉球文化圏全域がかつてそうであつたことを示していると思います。これが一つの古い墓制の流れであります。新しい墓制としては、洗骨改葬としての墓制です。これにはいろいろな形態があるのですが、ともかくこの二つの流れが琉球文化圏の基本的な葬・墓制の流れだと考えられます。洗骨改葬による葬・墓制は沖縄の上層階級の、あるいは首里ふうの流れであります。つまり、遺棄葬の墓制が琉球の基層的な流れです。

こうした墓制のもとでいろいろなまつりごとが行われますが、墓前祭も注目すべきであると思います。墓の前に門中などの一

族が集まり、ごちそうなど並べて盛大にまつり、時には歌ったりします。沖永良部島のトゥールミ、沖繩のシーミー、それから徳之島のウヤフジ祭り、こういうのを代表としまして墓前祭が行われます。ちなみにシーミーは、つまり清明祭は、宮古島にはないので、そのことからこれは比較的に新しい沖繩風のものであるといえます。

しかも中国から伝来したことはご承知の通りであります。このようにシーミーは新しいのでありますが、この墓前祭は、先程の二つの葬・墓制の流れの、第二の洗骨改葬の流れをくむ祖霊祭と考えられます。したがって全体が新しいわけです。新しいといっても相対的な新しさだと考えられます。

第一の基層的な流れ、つまり遺棄葬的葬・墓制の流れとしても少し考えなければならぬのは、先ほども述べたようにここに葬ったきり、二度と行かないということです。例えば、加計呂麻島の近くの与路島の方々は、死者を宇検村の湾内の入口に浮かぶイザトバナレ（枝手久島）に運んで

いって、洞窟の中においてくるといわれています。もともと与路島には積石墓の形式の、ムヤバカがあります。それは、昔は屋根があつたことです。それは、サンゴ礁を積んだ中に木棺をおいていたのです。こうしたりっぱな墓地があるにもかかわらず、イザトバナレに運んで行ったというのはなぜでしょうか。与路島自体に二つの葬法の流れがあることになりましたが、積石墓の方はノロをはじめそういう階層の墓だと考えれば、イザトバナレのほうは庶民のものだといえましょう。すると庶民の方が古くて、上層の積石墓は新しい墓だといえそうです。

古いほうは、はるかかなたのかねて往き来のない無人島に葬るといって、海上他界の聖地視的な観念が認められます。一方、ムヤバカの方はこれはモガリヤでありますので、もとは、これも首里の上層階級にはいつて来て、そして琉球文化圏に普及していったと見なければなりません。

先述の第一の遺棄葬の流れの中で、風葬

の場所に葬ったきり再び行かないということであれば、祖霊は一体どうなるのか。先祖は大事にしないのか、という問題が起つてきます。これは霊肉分離の思想が背景にあると考えますと、死体にはもう用はないけれども、霊の方には用がある、いや鄭重にまつらなければならない、こういうことになるかと思われれます。では、その霊はいつ、どこで、どうしてまつるのか。これが又、問題です。南島では、死後三日目にマブリワシすなわちマブリワカシをするのですが、それはユタが介在して行います。ここでアイヌの葬法も少し比較してみたいと思います。アイヌは命日の日に、家の東側にあるカミ窓の下の外庭にイナウを立てて、故人の好きなタバコとか果物などを供えて、先祖祭りをします。これをシヌラツパすなわち「本当に落ちる涙」の祭りといえます。その最初にまつるのは、死後三年目の命日です。

琉球では死後三日目にマブリワカシをします。アイヌの場合は三年の経過期間をへ

てやっていることになりましたけれども、基本的には、両者はよく似ているといえます。墓を見ますと、アイヌの場合には、男墓と女墓とあるようですが、私も墓地にはいつてみましたが、山中や野原の奥に土盛りをし、大きな塚木みたいな墓標を一本立ててあります。男性は先が尖った墓標を、女性は十字架ふうにしてあり、それぞれ紐や布を巻いたり垂らしたりしてありました。ところが、いちめん、草ぼうぼうで、埋葬したきり二度と行っていないようです。つまり、捨て墓であります。本質的には南島の遺棄葬の葬法と全く同じと見ました。もっとも、アイヌ墓地も最近はやマト式の角柱石塔が増えてきています。

アイヌ本来の墓は土盛りに墓標を立てたもので、遺棄葬であります。しかしその代りに命日には家族の住む主屋のカミ窓のそばの庭に招待して祖霊祭をするというわけです。大いに注目しなければならぬことです。それは又、家を中心にして見ますと、家の中に死霊を入れないということです。

家の中で死者の弔いをやらない。全部外でやるということです。カミ窓のそばでそれを執行することは、先祖の死者をカミとして扱っていますが、外庭ではまつるけれども決して家の内には入れないということは大へん重要な現象です。

四、祖霊祭の時期

九州から与那国島までの南西諸島全域の祖霊祭の期日を並べてみますと、冬の祖霊祭と夏の祖霊祭の二通りに分けることができます。冬の祖霊祭は、まず、トカラ列島の旧暦十二月の七島正月に伴うオヤダマ祭りを挙げることであります。オヤダマ祭りとは大へん面白い呼称です。そして、一月十六日の徳之島のウヤフジ祭り、同じく一月十六日の沖永良部島の墓正月、沖縄本島の十六日ミーサー、宮古島のグシヨ（後生）の正月、八重山の十六日、あるいはグシヨの正月などを挙げることであります。グシヨの正月は奄美の各島でもありますが、これらは旧暦十二月もしくは旧暦一月の祖

霊祭です。これは冬の祖霊祭で、しいていえば冬至型の祖霊祭ともいえるでしょう。

そしてこれらは、十六日というのでわかるように、旧暦の暦を基本にしてあります。その旧暦の暦は、もともと発信地は中国ですが、琉球には日本からはいったと考えられます。琉球においてヤマトの暦が採用されると、採用された段階から以後、冬型の祖霊祭がひろまったと考えなければなりません。暦を採用するということと、それが琉球文化圏に広く行きわたるということは、相当の政治権力を伴わなければならないことです。こういうことを考えますと、古くは按司時代から、新しくは首里王朝の樹立、そういう頃から暦とそれに伴う冬の十六日の祖霊祭は普及していたと見なければならぬ。したがって、冬期型の祖霊祭は比較的に新しいものです。このことはヤマトにおいても、一月十六日に先祖祭りをはじめ、いろんな霊的な祭りがあることでもわかります。したがって、琉球の十六日祖霊祭はヤマト的な祖霊祭です。ただトカラの場合

がちよっと違うのが面白いです。それが十二月一日というのは琉球の夏型祖霊祭に少し近いです。

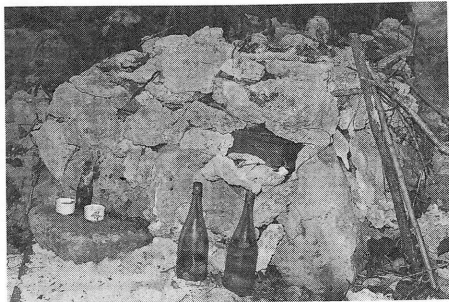
ところで冬期型祖霊祭を十六日という日を選んで行うということも注目しなければなりません。これは正月の一日から十五日までが正月で、十五日が過ぎると正月ではなくなることを意味しています。実際、二十日になると、全国的に正月納めをやります。そこで、冬型の祖霊祭は、十五日でハレの正月が終った翌日、さっそくあの世の者を呼び出して祖霊祭をやったわけです。つまりこれは、旧暦正月を大いに意識してここに日取りを設定したということになります。その旧暦正月を分析しますと、一日から七日、八日から十五日という二段階になります。旧暦では十二月三十日の晩からもう祭りは始まっています。その最初の七日と、それにつづく最後の七日があつて、その第一週目の正月、つづいて第二週目の正月のあとに祖霊祭は設定されたのでした。このように手がこんでおります。

それに対して、トカラの正月は十二月一日から七日までの第一週の正月のみあつて、八日からあとの第二週の正月はないのです。つまり、七島正月には第二週の正月はないのです。ところが七島正月は南島の夏型祖霊祭と構造は同じです。その構造は、例えば奄美のアラセツ、沖縄各地のシツやシバサシがそうであるように大体一日から七日目までが重要視されています。あと、いろんなのがくっついていられるけれども、基本は七日までであります。このように夏型の南島の祖霊祭と、トカラ列島のオヤダマ祭りは似ているのであり、これは、夏型祖霊祭がトカラでそのように変化した（期日を変えた）のだと考えることができます。構造は夏型でありながら、期日は冬型に近いということは、ヤマト的になりながら変化したといえましょう。これは、農耕による生産と関係があると思います。生産システムの関係です。そういうものを反映しております。

冬型の旧正月に伴うヤマト的祖霊祭に対

して、夏型の琉球正月（夏正月）に伴う祖霊祭についても少し述べてみます。喜界島のシチウンミは、旧暦八月のシチから五日目にシバサシを行い、七日目にナンカビーを行います。奄美大島では、やはり旧暦八月の初丙の日にアラセツを行い、七日目にシバサシをし、甲子の日にドンガといって改葬をします。沖永良部島では、旧暦九月にトゥールミをし、次いでナンカビをし、トゥールミより十日目にドンガをし、墓送りをします。沖縄本島国頭のシヌグ・ウンジャミは、旧暦七月です。これは『琉球国由来記』にも「しのご、海神祭」「大折目」などと書いてあるので、南島大折目であり、つまり南島正月であります。しかし、シヌグ・ウンジャミの祭りは、ノロが介在しますが、特にウンジャミがそうです。ノロが介在するということは、ノロ制度が確立してからの大折目ということと比較的に新しいことであり、琉球王権の確立と共にウンジャミはできたということになります。シヌグはちよっとそれより古いのではないか

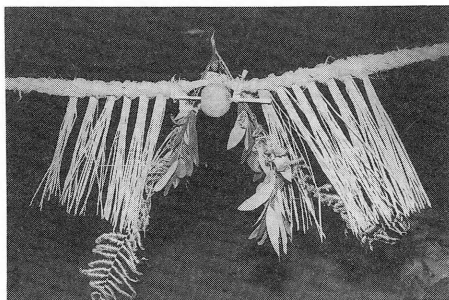
墓制・正月・祖霊祭



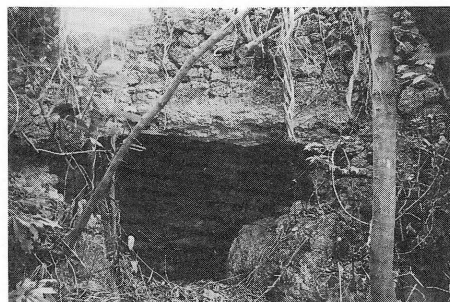
テラヤマの積石墓（トカラ列島、小宝島）



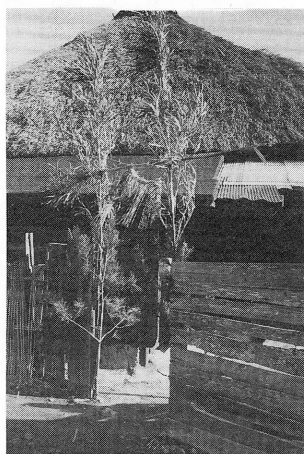
崖下の遺棄葬墓地（与那国島）



ミカンは外に向けて飾る（種子島の門木のシメナフ）



トゥール墓（冲永良部島）



鬼門に矢を射る門松
（トカラ列島）



縁側の隅のオヤダマの棚を拝む
（トカラ列島のオヤダマ祭り）



縁側の隅に供えた山海のごちそう
（トカラ列島のオヤダマ祭り）

と考えています。ともかく、これも正月にはちがいないといえます。

沖縄本島の南島正月と祖霊祭のシツ、シバサシ、ヨーカビが旧暦七月にあるのに対し、宮古島ではひと月早めて六月にシツ・ヤーバレ（家祓い）をし、八重山ではシツは旧暦七月か九月にあつて、それも島によつて違うのですが、これらはすべて夏型の琉球正月に伴う祖霊祭です。そして、これらは夏至ないし秋分型ともいえると思います。ヤマトの冬至ないし冬型のものと対的な祖霊祭です。この祖霊祭では、その後いろいろなウマチー（お祭り）がやつてきます。それで、南島正月と祖霊祭は収穫祭であるウマチーを背景として起つていとも考えられます。

夏の収穫祭は沖縄特有の収穫祭で、これは佐々木高明先生がよく述べているように、沖縄の農作は冬作システムを背景にしています。つまりウマチーや南島正月は冬作システムに伴う夏の収穫祭を背景としたひとつの折目であり、そして来年の収穫もよろ

しくたのみますということであります。ただ、その場合に稲だけでなく、稲、麦、粟、豆というぐあいに五穀が等価的に重んぜられて、ウマチーやプーリとして行われていることを注目しなければなりません。これは稲の重みというよりも、相対的に麦、粟が非常に重視されていることであつて、どうもこれは雑穀的な収穫祭です。それを背景としてシツやシヌグ、ウンジャミなどの折目があるということになります。それに対して、南島にもある旧正月に伴う十六日の祖霊祭は、ヤマトの方を考えればもう一方的に稲中心の考えに沿うものです。ヤマトのそうした稲正月が南島にも流れてきているというわけです。そしてついでに先ほど申した一日から十五日までの、第一週から第二週までの正月を考えますと、特に小正月はその儀礼内容から見てもこれは稲の正月であり、稲作儀礼の正月であります。それに対して、最初の一日から七日、これはどうも雑穀の正月のようです。ここにおいて、稲の正月があとから加わったと

考えなければなりません。そういう意味で夏型の南島正月、これを琉球正月ともいいますが、琉球正月に近いのが、冬型の中ではトカラの七島正月であります。なぜならば、第一週目の正月のみであり、雑穀的な背景を原理としているからです。

それから冬型の場合に、稲作正月明けの十六日にタマ祭りを設定していることは、大へん注目すべきことですけれども、実は漢民族の暦の場合も一月十六日が魔祓いの日になっているのです。漢民族の十六日に魔祓いがあるといえますと、琉球の十六日のそれはヤマトと似ているのですから、やはり中国から日本を通して伝播していると思われるべきです。十六日に設定というのもこれは沖縄で創始されたものでなくて、暦を踏まえて沖縄でもはじめたということになります。これは日どりの設定の問題であります。沖縄の夏型の祖霊祭こそは、沖縄本来のものであるということになってきます。そして正月も、この南島正月こそが沖縄の本来の正月であるとい

えるわけです。

さてその南島正月すなわち琉球正月の身ですけれども、いったいなになのだろうということになります。トカラ列島の場合、オヤダマ祭りという面白い名前がついている七島正月のことですが、これは、南島正月のタイプであり、その原型を示しているのではないかと思われます。トカラ列島は、琉球の中心からはるか離れた北端の地域であるので、民俗周圈論的に見て琉球の古い姿が残っていると見なければなりません。ならば七島正月を徹底して見る必要があります。

五、浮遊霊とオヤダマ

七島正月には、旧暦十一月三十日の晩にヤマトのトシの晩のようなことをします。そして翌十二月一日から二日、三日、四日、五日、六日、と六日の晩まで正月がつづき、翌七日は正月道具の始末の日です。はじめの三十日の晩にオヤダマを招待します。門口には門松を立てます。葉のついた二本の

柴木を、左右に一本ずつ立てます。そして、その間にもう一本、同じような葉つきの柴木を横におくのです。それは矢を射る感じになつており、事実それは矢で悪魔を射るのだといっています。それはたいがい北東か北西の方を指しているのですけれども、その横木に素朴なシメナワを張り、葉っぱつきの田芋をいくつか下げます。

そして三十日の夕方、主人が正装してやってきて門木に膳を供えるのです。その膳の中には、家族が食べるのと同じごちそうがはいっています。酒も持つて来て、門木の根つこの所に注いで拝むのです。こうした祭りは種子島でもやっています。種子島の場合は「御門木様の祭り」といつてめ得太い名前になっています。トカラの場合は悪魔祓いの形の門木の立て方といい、どうもそれは御門木様と呼ぶようなものではないようです。何物かをそこで歓待しているのは、種子島もトカラも同じですが、その歓待の気持が少し違うようです。

両者とも庭の奥には母屋があるわけです

が、母屋の中では床の間にごちそうをいっぱい並べています。同じタマを門口と床の間と二回歓待するのかというとそれはないはずです。というのは、門口と床の間の前は、同じ中身の膳を供えるのですから。いかにタマでも同じ膳を食べたら腹いっぱいになり食べきれません。だから門口で迎えるタマと家の中で迎えるタマは、別々のタマと考えられます。門口の場合、ここでおひきとり願うタマです。つまりここから内に来てもらいたくないタマです。それは、家の床の間に招待するにふさわしい聖なるタマに付随してやってくる、そこらへんをうろつきまわっているタマにほかなりません。つまり浮遊霊です。別名で無縁仏であります。

ちなみに種子島あたりでも門松には、シメナワの真中にミカンとか餅とか下げますが、それはすべて外に向けてつけてあります。内に向けてはいないです。これは外のものに食べさせるという趣旨です。決してこのように収穫できますようになどという

ものではなくて、実際に外のものに、つまり浮遊しているものに食べさせる食料だと考えられます。

こうして大晦日のその夜、タマ祭りが行われますが、トカラでは床の間には、田芋の根引のものと餅を供えます。ということは、田芋が非常に重要な食料であるということを表しています。そして、各家の縁側の奥に棚を設けてありますが、それをオヤダマの棚というのです。そこに水や神酒をおいて、下の方には机を出して、ありったけの山海の珍味を並べてあるという形です。ごちそうの皿や椀は位牌の数だけの膳にそれぞれおきます。そして縁側の天井からは魚を二匹、腹合わせにした掛けの魚をつり上げてあります。ですから、七島正月の料理は生ぐさ料理であってお盆とは違います。それでこのタマは仏教以前のタマであることがわかります。でもそれは表の間にくるのではなくて、表の間の横の縁側の隅の方にくるのです。それでも家の中にくるという意味では、だいたいなタマに違いありません。

せん。このタマは、きつと先祖であるに違いない。なぜなれば位牌を置いてあるからです。位牌の主でありましょう。その位牌は四十九年忌以内の位牌であります。沖繩では三十三年忌ですが、トカラでは仏教があるので、四十九年忌まで拝むのです。でもだいたいなオヤダマを縁側の片隅にまつるということは、門松の悪魔祓いと同じような気持ちが働いておるからでしょう。たとえ先祖霊といえども、家の中まで来て欲しくない。せめて縁側でがまんして下さい。雨戸を少し開けてあるので、そこからおはいり下さい、そういう親しみと恐れが入りまじった表現がもう、もろに伝わる形で行われているのです。

こう考えると、小宝島のビローの森の中に葬つてある二度と行かない風葬墓と、祖先のタマシイの祭り方の関係がだんだんわかってきます。トカラ列島では、年に一回オヤダマ祭りをして祖霊を招待し、ねんごろにまつったわけです。そのねんごろも内容が問題であることは、先に申した通りで

あります。

もつともトカラ列島の家の中には仏壇もあります。縁側の奥にオヤダマの棚があると、表の間の床の間の横に仏壇があつて、ナンドには内神があります。一番だいたいな神は家の内側にあるのです。火の神は居間にあります。仏壇にはオヤダマは招待しないで、縁側の奥に招待する、ということは仏壇というのは非常に新しいということですが。これは坊さんの指導でここに設置したと考えられ、きわめて新しいものです。といつても江戸時代の末頃と考えられます。

トカラのオヤダマ祭りというのは、いったいどういうものなのか、もう少し見ていくことにします。それは第一に、山海の珍味を盛るという収穫祭の趣旨があります。そして新しい年の豊作祈願祭にもなっているのです。第二に、同時に悪魔祓いをしていきます。悪魔は、先ほど申しました浮遊霊ですが、これをトカラではヤブレコブレといひます。

第三にタマ祭りです。タマ祭りは二つあ

ります。ヤブレコブレのタマ祭りとは、正統なる祖霊、それは四十九年忌以内の祖霊という近祖霊のタマ祭りです。位牌がない時代はどうだったのか、それは覚えていない範囲ということになります。人びとは正月には覚えていた範囲のそれぞれの先祖をまつると、それからオヤのところを訪問します。オヤは本家の所にいますからそこを訪問します。すると、このオヤは生きているオヤダマです。これはイキダマを拜んでいるのです。節句の場合には、ヤマトの南九州でもオヤゲンゾー（親見参）といって、トカラ列島の親拜みに近い形式をとります。してみると、生きている親を拜む、死んだ親を拜む、ヤブレコブレを拜むという三つのタマ祭りが、この正月に行われるわけです。そしてこれは、正月なんですから、明らかに節替りです。つまり節替りに三つのタマ祭りをするということになります。

そしてその期間は、先ほど申したように、十二月一日から十二月七日まで、まあ始まりは十一月三十日の夕方から始まりますが、

十二月六日の晩まで一週間ということになります。ところでこの十二月六日の晩には、トカラ列島の各島々では、女性神役のネーシ（内侍）が区長さんに、いまオヤダマ様のおたちだと合図します。それがネーシには見えるということです。すると区長さんがみんなにオヤダマのおたちを伝達するので、そこで人びとは、いつせいに飾った品物を仕末するのです。ところが十二月六日の晩におたちになったトカラのオヤダマは、全部、北端の口之島に集合するというのであります。口之島では、十二月七日にオヤダマはうちそろって舟出するといえます。その行先は甌島だといわれています。

甌島のどこに行くのかと聞きますと、洞窟があつて、その入口にはススキが生えていて、七日の晩にはススキが内側になびいているということです。それではということ、私は甌島を廻って見ました。下甌村の手打にたしかにそういう洞窟があるので、甌島の方々はそれを全く知らないのです。知るはずもないわけで、廻った私が愚

かですけれども、きわめて象徴的な話です。トカラ列島民が行ったことのない近い島で、しかもヤマトに近い西方浄土的な、そういう島として甌島が一番適しているわけです。それは先ほどの与路島のイザトバナレと似た感覚です。ちなみにトカラ列島では正月が三回あります。七島正月を一番だいいじな正月としまして、次に旧正月、それから新正月です。旧正月は、島津氏が一六〇九年に琉球を攻めたあと、トカラはその直轄地になるのですが、それ以後、導入したものでしょうと考えられます。

さて、こう見てきますと、ヤマト・琉球の正月とは何かという問題が新たに起ってくるのです。しかし、屋久島あたりになりますと、タマがもう一つ加わってきます。それは、今述べたのは人間のタマでしたが、屋久島の場合は穀霊のトシダマが入っているのです。床の間に一升マスに入れて飾つてある物が、米であり、主人はその米を捧げ持つて拜むのです。

ところで夏正月すなわち琉球正月に伴う

夏期祖霊祭において、沖縄や奄美ではトカラのようなオヤダマ祭りの形をとり切っていないのです。奄美のアラセツでは、仏壇にいろいろな品物を供えて拝みます。シバサシでも仏壇を拝みます。祖霊と仏壇が合体しています。でも、たまに古い家やノロ筋の家ではアラセツの日、先祖霊へは縁側の近くの座敷に膳をいくつも置いて先祖拝みをします。シバサシは悪魔祓いの日です。しかし、トカラほどの悪霊祓いのつよさはない。それはトカラが琉球文化圏の北端であり、そこに消え残ったということもいえます。でも、琉球正月に伴う祖霊祭の古い形、トカラのオヤダマ祭りのような形態は奄美や沖縄ではいったどこにいったかという、それは奄美・沖縄でも行われている冬のヤマト型の祖霊祭に移転したということが考えられます。したがって、夏期型の祖霊祭の影がうすくなってきたというわけです。又、ヤマトから盆行事が入ってくるにつれて、そっちのほうにも移転した。ヤマトにおいても、冬の祖霊祭が

盆に移転したといえます。こうして琉球の夏正月やヤマトの冬正月では、オヤダマ祭りはしだいに薄くなっていったというわけです。

六、来訪神と祖霊

ここで来訪神の問題にふれますが、正月というのはいずれにしても新しい節を迎えるについては、来訪神がやってきて、その力で新しい節を展開できるといふ発想が、特にトカラのボゼの場合などにあるようです。ボゼについて簡単に述べますと、七島正月に旧正月を導入することによって生じたヒチゲー（日違い）という行事があります。これは本来、七島正月に伴う古い節分すなわち節替りの形です。節分は翌日の立春とともに古い正月を構成していますが、その夜、ボゼが現れて、人びとを説諭して旧年の穢れた古い心から新年の清らかな心への転換を迫り、そうして節自体の新しい転換をするという機能を果たしているようです。⁽⁴⁾このことはボゼに限らず甕島のトシ

ドンや秋田のナマハゲに至るまで、来訪神は皆そういう力をもっていると思われます。さて、ここに祖霊の分類をして、さっきの話を続けて行きたいと思います。一つは無縁仏です。すなわち浮遊霊です。もう一つは遠い祖霊すなわち遠祖霊、さらにもう一つは近い祖霊、近祖霊です。遠祖霊は高祖霊でもあり、その霊は、奄美ではコスガナシ、喜界島ではホース、屋久島ではオゴソ、種子島ではオコーソーといえます。近祖霊は先ほどの三十三年忌又は四十九年忌以内の祖霊であり、位牌のある祖霊です。この祖霊は夏期の琉球祖霊祭においては、家の位牌の所に招待する祖霊です。

そして無縁仏のムンは、トカラのヤブレコブレと同じものですが、それはさまざまな形で小さく歓待されます。例えば旧暦八月のアラセツなどの南島琉球正月においては、正祖霊に対する膳のヒナ型の小さいのを、ただ皿一枚もしくは木の葉っぱなどにオカズを少しずつとつて縁側の隅にちよつとおいたりしています。それだけの小さい

浮遊霊・祖霊祭・来訪神



大きな火祭りの鬼火焚き（屋久島）



霊屋に描かれた先島丸（屋久島）



アラセツの浮遊霊への供物（奄美大島、竜郷町）



シバサシの日、仏壇を拝む（奄美大島、瀬戸内町）



シバサシの日、先祖の衣類をひろげて拝む（奄美大島、宇検村）



ボゼの出現（トカラ列島、悪石島）



八朔メン（薩南硫黄島）



米、餅が中心を占める穀霊信仰（屋久島）

歓待で、浮遊霊はお引きとり願っているのです。シバサシの日には主婦が門口で小さな火を焚いて拝みます。それは腰から下が水にぬれている霊をまつているのだといえますから、これは水難者であります。水難者は非常死人であり、まつられざるその霊は祟りやすい。この場合、非常死人つまり浮遊霊を門口で歓待でなくて、火で焼き払い、追いはらっているというのが真相です。

一方、先祖霊は家の中の仏壇の前で、沖縄では位牌の前で歓待して拝んでいます。では遠祖霊は拝まないのかという疑問がわいてきます。先ほど申したようにトカラの祖霊は甕島に行き、与路島ではイザトバナレに行くということでした。屋久島では特有の霊屋を作り、それを墓におきます。その側面に「先島丸」と書いてあって今でも見られます。その先島はどこですかと聞くと、それは見たこともなく、よくわからなけれども、きっと草垣島のあっちの方ではなかろうかということです。草垣島は屋久

島の西方の無人島であって、つまり海上他界です。その海上他界を奄美から南では、ニライ・カナイというわけです。

死んでまもない祖霊すなわち近祖霊はこのような彼方の世界をめざして行くのですが、三十三年忌又は四十九年忌以内の近祖霊はまだこの世に未練があつて、完全に彼方の世界まで行きついてないでしょう。

年忌祭りを終えてそこへ行きついた霊が遠祖霊であります。

では節替りにやってくる来訪神はどこから来るのか。又、来訪神の中の、例えば宮古島のパントウプナハなどは、いったい何の神なのか。それはどうも祖神のようだと現地の人はいっています。それから八重山のアカマター・クロマターにしても、どうもはるかなる祖先の神に対応するような島民の感覚です。そう考えたほうが全体の情況が解釈しやすいのではないかと思われる。またマユンガナシもそうです。琉球に古く出現したキンマムン（君真物）は、ニライ・カナイからやってきたと信ぜられて

いたようです。アカマター・クロマターなどもそういわれています。

これらのものが、キンマムンもふくめて、すべて共通するのはその姿が人間の形をしていることです。人間の形をしていて人間でないというのではないはずです。それが生きておれば人間ですが、もしそれに魂があるとすれば何なのか。これは普通の生きている人の魂や精とは違う。ましてや近頃は死んだ人の幽霊でもない。とすると残るは遠祖霊しかありません。つまり来訪神は高祖霊を反映しているのだといえましょう。それが高祖霊自身であるかどうかわかりません。少くとも高祖霊を反映しているということは、村人の対応の中にもそれが見られるのです。つまり来訪神は祖神的なものであります。

また宮古島あたりではマウという守護神を、孫つぎで娘たちが婆さんからついだりしていただいておりますが、これは守護する神であつて祖霊自身ではありません。しかし孫つぎで次々に伝わる間に、これはお

婆さんもその上のお婆さんも守護されたという事で、そのようにして人を守護する守護霊が伝わる間に、お婆さんたちの霊も複合していったと思われます。その意味ではマウも、もともとは遠祖霊ではないけれども遠祖霊を反映しているということができるようです。そしてマウに守護された女性性は、いつそうつよい自信をもって兄弟をも守護するというふうになリガミ的にもまた機能していきます。

七、火祭りとタマ祭り

さて、いろいろと述べましたが、もう一つだけ述べますと、シバサシの時に、小さな火を門口に焚きますが、これは小さな火祭りです。小さな火祭りは南島各地で行われます。例えば屋久島では大きな火祭りも小さな火祭りも行われるのです。大きな火祭りは鬼火焚きのこと、一月七日に行われます。子供たちは鬼火焚きに使った燃え残りの小さな柴を家に持ち帰って、それをもう一回家で火に焼きます。こうして小

な火祭りをするのです。同じことを種子島でも行います。但し、種子島では鬼火焚きではありません。小さな火祭りだけです。この小さな火祭りは奄美のシバサシの火とよく似ています。椎葉あたりでは、正月の七日に鬼火でなくて庭先で、家ごとの火を燃やしています。このようにして小さな火祭りが琉球からヤマトの方までずうっとあつて、家庭での悪魔祓いを行うのです。

一方、屋久島を南限とし、種子島は除外して、そこから北の方青森まで大きな火祭りが行われます。それが夏にあるのもありますが、冬にあるのも多い。要するに大きな火祭りをを行う。屋久島では、小さな火祭りと大きな火祭りの二つの火祭りがだぶっております。屋久島は慶長十七年（一六一二）以来、島津氏の直轄地でありましたから、薩摩半島からいろんな民俗がもろにはいつてくるのに対し、種子島は中世以来、島主がおつて統治したので古風を残しています。薩摩文化ももろには入ってきません。火祭りもそういう状況を反映していると考

えますと、屋久島の大きな火祭りの鬼火焚きは薩摩・大隅に連なるものであり、種子島にも屋久島にもある小さな火祭りは鬼火焚きよりも古いものであるといえるようです。それは又、南島のシバサシの小さな火にも通じます。

小さな火祭りはヤマトの盆の門火にも通じます。門火を伴う盆は、夏期の琉球正月の延長と考えますと、これはヤマト全体が琉球正月の夏正月に根底は覆われているということが考えられます。それはヤマトにも雑穀中心の夏正月があつたということが、この点からも肯けるようです。さて、一月七日、この日が鬼火焚きや小さな火祭りをする日であつて、悪魔祓いの日です。正月は一日からはじまって、七の日に結末をつけて、その日に悪魔祓いをやるという大へん面白い構造です。そしてこの間中、先祖を拜んでタマ祭りをしているのですが、七日を最後とするけれども、さらにもう一回冬期の稲作正月を招来した地域では十五日にこれをやるということになります。それ

で鬼火焚きを七日にする所もあれば十五日にする所もあるわけです。ただ実際には正月一日は七島正月に見たように十二月三十日の晩から始まり、七日は六日の晩から始まるので、タマ祭りは三十日の晩から六日の晩までであり、七日の昼間はその後始末の日であります。浮遊霊などを焼き払い追いついて、タマ祭りにケリをつける日なのです。この七日間の祖霊祭の七という数字はいつ頃から採用されたかわかりませんが、旧暦の暦採用よりずっと古いでしょう。とにかく正月七日に鬼火焚きなどの火祭りをするのはその前七日間のタマ祭りの決算であって、悪霊祓いの総ざらえをし、フィナーレを実施しているのです。そして翌日からは死霊臭のないいつそう清らかな日常生活に戻る準備をしているのだといえます。これが正月の根底にある一つの原理だと考えられます。

八、まとめ

結論としまして、

第一に琉球文化圏の墓制の基本は、遺棄葬の風葬であるということが指摘できます。第二に洗骨改葬およびそれに伴う墓前祭というような葬・墓制は、比較的に新しいということ。第三に墓前祭は骨を拝む祭りですが、家での祖霊祭はタマをまつる祭りです。第四に遺棄葬の風葬の祖霊祭は、墓前祭ではなくてトカラの正月やアイヌのシヌラツパが示唆するような、年一回の（琉球では夏正月の）、自宅あるいは庭でのタマ祭りであったのではないかとことです。

第五に、その場合の祖霊というのは、三十三年忌又は四十九年忌以内のまだ覚えてる範囲の近祖霊であって、半ば恐れながら、そして古くは節替りに招待してまつたものであらうと考えられます。一方、遠祖霊は節替りの日に来訪神として来るわけですから、この日は近祖霊、遠祖霊ともやってくるという大へん重要な日になっていきます。

第六に、節替りすなわち正月は、このよ

うにして、破壊・消滅そして死に連なる先祖のタマを慰めまつって、その祟りをなくそうとしつつ、かつ新しい年の家族の健康と豊作を祈ったものであらうと考えられます。

死者の祟りをなくするというのは、生者の側の論理です。その論理にしたがつて新しい年の家族の健康祈願をしているわけであり、これが正月の内容的な原理であらうと考えられます。

注

- (1) 沖縄県地域史協議会編『シンポジウム 南島の墓——沖縄の葬制・墓制』（一九八九年、（有）沖縄出版）
- (2) 下野敏見著『東シナ海文化圏の民俗』（一九八九年、未来社）
- (3) 名嘉真宜勝「沖縄の葬送・墓制」『沖縄・奄美の葬送・墓制』、一九七九年、明玄書房）
- (4) 下野敏見著『カミとシャーマンと芸能』（一九八四年、八重岳書房）

（本稿は平成六年七月四日、国際日本文化研究センターでの共同研究「日本文化の深層と沖縄」の研究会の折発表したものの録音稿である。一部書き直した。）